

琉球大学学術リポジトリ

フランス語史料にみる1879 年のコレラ罹患者の洗骨について

メタデータ	言語: 出版者: 国際地域創造学部国際言語文化プログラム 公開日: 2020-04-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 宮里, 厚子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/45527

フランス語史料にみる1879年のコレラ罹患者の洗骨について

宮里厚子

1. はじめに

1879年(明治12年)、廃藩置県により琉球藩が沖縄県となった、いわゆる「琉球処分」のちょうどその年の5月以降、沖縄本島や宮古島ではコレラが猛威を振るった。患者1万人以上、死者6千人余りが出た¹とされ、沖縄県の罹患者率は全国平均の5倍に及んだ²ということである。その3年後の1882年、フランスで出版された医学雑誌には、1879年にコレラに罹患して亡くなった死者の洗骨に関する短い記事が引用されており、沖縄における洗骨の儀式を紹介するとともに慣習通り洗骨を行おうとする地元住民に頭を悩ませる明治政府側の様子が紹介されている。この記事は別の医学誌から引用されたものであることがわかるが、それ以外には執筆者の名前も、引用された雑誌の日付もなく、誰がどのような経緯で書いたのかは知ることができない。

本論文では、まずこのフランス語の短い記事を翻訳して全文を紹介し、次にこの記事が掲載された雑誌について調査した結果を報告したい。最後に、フランス語で残された琉球・沖縄に関する歴史的文書を概観したうえで、この記事がその中でどのように位置づけられるのか、考察を加えてみたい。この記事が書かれたのが「琉球処分」直後であり、エピソード自体もこの時期特有の出来事で記録に残す価値があると考えられるほか、琉球・沖縄に対するフランスの関心や当時の沖縄の社会状況を象徴的に表す記事だと考えられるからである。

2. フランスの雑誌記事におけるコレラ罹患者の洗骨

はじめに、1882年9月3日に *Lyon Médical* という医学雑誌に掲載された記事本文を以下に全訳する。

「日本における死者の洗骨」

日本では、政府が時に奇妙で滑稽な、しかし本質的には非常に深刻な困難に直面している。

琉球地方では、はるか昔から、死者が亡くなってから3年後にその骨を取り出して洗う習慣がある。

普通ならこの恭しい洗骨の儀式は、決まった日に警察の監視下で何千もの洗骨が一度になされ、特に大きな不都合は起こらない。

この独特な行事の光景は、ヨーロッパ人の繊細な感覚には少し抵抗があるだろう。というのも、それぞれ全身の遺骨が念入りにお湯と石けんでゴシゴシ洗われるからだ。これは、女性や娘たちだけが行う作業で、彼女たちの熱心さはしばしば祖先の骨を磨き、ワックスまでかけてしまうほどである。

一般庶民の亡骸については、遺骨の焼き入れまたはどちらかという調理は巨大な釜で行われ、それには専門の請負業者がいる。上流階級においては、この行事のために花輪で飾られ光り輝く家族専用の鍋で、ブイオンはゆっくりと煮込まれる。

ところで、去年、敬虔な琉球の住民たちは1879年のコレラの被害者も全て墓から取り出すことになっていた。この伝染病患者の洗骨が地上に災禍を再びもたらす可能性があったので、明治政府は住民たちが考え直すよう説得しようとした。

複数の高官が現地に赴き、洗骨を今回だけでいいからやめるよう説得した。しかし琉球の住民は公衆衛生よりはるかに死者の手入れのほうを好み、彼らに石を投げつけた。

したがって、琉球の死者のポトフは(例年のように?)執り行われたが、ただし今年はより多くの注意と敬意をもって見守られた。

結果に関しては…、それは神の知ることだ。

以上、短い記事であるが、ここで書かれている内容について一応立ち止まっ

ておきたい。まず洗骨の儀式は、確かに琉球では古くから行われていたが、記事にあるように必ずしも死後3年目で行うということではなかった。『沖縄県史』によると、3年に限らず「『一年目』、『三年目』、『四年目』、『七年目』、『十二年目』とある年限できっぱり洗骨を行うとする地方が少なくない」(p.637)ということであるから、取材した地域が3年目に行う風習があったと考えられる。ちなみに、後述するフランス海軍中尉の Revertgat も、1877年に琉球を訪れたときの紀行文のなかで、「洗骨」を意味する記述はないものの死後3年で近親者の亡骸を取り出し、骨を骨壺に収めることで弔いの儀式が完結すると書いている。

同様に、記事では洗骨は鍋に「お湯」を入れて行うとされ、そのことから「調理」や「ブイヨン」、「ポトフ」という言葉を使って少々滑稽に書かれているが、『沖縄県史』によると洗骨には水を使うのが一般的でお湯を使う地域は比較的少数だったようである (pp.642-643)。さらには「石けん」でも洗うと表現されているが、酒やチョージ湯(香料)を用いて最後の清めをする地域があったということであるからその類のものを指しているのかもしれない。記事ではさらに一般庶民と上流階級の洗骨の違いをも描写している。

以上のような洗骨に関する記述が事実かどうか本稿では議論しないが、記事によると、結局その年の洗骨が人々によって執り行われたことは事実のようであり、また1881年にコレラが再流行したという記録はないことから、当局が心配するような事態にはならなかったのであろう。

3. 掲載雑誌について

先に引用・翻訳した記事は *Lyon Médical* というリヨンの医学大学で発行された雑誌の1882年9月号に掲載されたものである。フランス国立図書館のデータベース Gallica で「Riukiu」と検索した際に見つけた記事であるが、その雑誌の後半、「Variétés」というコラムのなかで博士論文発表会に関する情報や次の編集委員会の通知の間に少々唐突な形で紹介されている。この記事に関する前置きも、コメントもなく執筆者名も書かれていないが、文末にかろうじて「(*Médecine populaire*)」と、引用元と推測される雑誌名が記されている。

La Médecine populaire は1880年7月1日にパリで創刊された医学分野の週刊

誌である。1884年7月には廃刊された短命の週刊誌ではあるが、医学の一般的な普及を目的として4年間で計201号発行された。フランスでは当時、イラスト入りの新聞・雑誌が様々な分野で出版されており、またアラブ・アフリカ世界や東洋などに取材したエキゾチックな内容の記事も多く掲載されていたが、*La Médecine populaire* もそれらの特徴を踏まえた新聞である。この新聞について詳しい分析をした Baudrimont と Poirier の論文によると、そこに掲載された記事は、解剖知識、医学器具、外科技術、動物、植物、怪物と狂人、民俗学的话题などいくつかのカテゴリーに分けることができるということである。沖縄の洗骨に関する記事はしたがって、エキゾチックな要素を含んだ民俗学的话题を提供する分野のものであったと考えられる。実際の記事を探し、執筆者名を確認しようと試みたが、1882年以降に発行された号は入手することができなかった。

しかしながら、同じ編集者が同時期に発行していた *La Science populaire* という雑誌を紹介した Hohnsbein の研究論文のなかで、19世紀のこの種の新聞・雑誌について「執筆者に関していえば、明らかにするのが難しいことが多々ある。ペンネーム、匿名、他紙で掲載された文書の再利用はよくある慣行であった」(p.1)としている。入手できた *La Médecine populaire* の1号から37号までを実際に見ても、この点は明らかである。したがって、たとえ実際に *La Médecine populaire* に掲載された当該記事を入手できたとしても、執筆者や原典に関する情報が少ない可能性はある。

一方で、フランス語で書かれた当該記事とは別に、同様な記事を英語でも見つけることができた。「CURIOUS CUSTOM IN JAPAN」と題されたもので、*Notes and Querries* という雑誌の1882年3月号に掲載されている。*Notes and Querries* の日本関連記事について調査した志村真幸の言葉を借りると、この雑誌は「イギリスを中心とした欧米のアマチュア知識人が、フォークロア、民俗学、語源、文学、歴史、人物などについて議論した投稿誌」(p.129)であり、ある情報を提供する投稿に対して次号以降、質問やコメント等が寄せられるという形態の雑誌である。この雑誌に掲載された琉球の洗骨の記事はフランス語の記事に比べると短い、投稿者名やその情報源が明記されている。

記事を投稿したのは英国人の Everard Home Coleman (1818-1906) という人物で、ロンドンの考古学会や王立地理・歴史学会などに所属していたということである。Coleman による記事の冒頭には、「以下は1881年9月1日に *Overland China Mail* 誌に掲載されたもので、*Notes and Querries* に紹介すべきものである」(p.187) と書かれている。これにより少なくとも英語の記事の情報源は *Overland China Mail* の記事であることがわかる。これは香港で1848年1月に発刊された週刊の英字新聞紙ということである。現在のところこの新聞が入手できていないため、どのような種類の記事として掲載されたのか、誰かが実際に沖縄で取材したものなのか、または日本の新聞等からの翻訳なのか、詳細は知ることができない。

Lyon Médical のフランス語の記事ももともとこの *Overland China Mail* から借用され、*La Médecine populaire* で翻訳・紹介された記事を読んだ執筆者が *Lyon Médical* に転載した可能性もあると考えられる。ただ記事を読み比べてみると、Coleman が *Notes and Querries* に引用した英語の記事には洗骨が行われるのが「この夏」、「今年」という近い未来の出来事で現在形や未来形の文章で書かれているのに対し、1882年のフランス語の記事では、「去年」の出来事として紹介され、住民が高官に石を投げたことにも言及していることから、洗骨が実際に行われた後、新たに取材して書かれた記事であると考えたほうがよさそうである。

以上、*Lyon Médical* に掲載された記事に関して、少ない情報から明らかにできた事柄はこの程度で、最も重要な情報源と思われる *Overland China Mail* 誌および *La Médecine populaire* の掲載号が入手できていないため、どのような経緯でこの記事が書かれたのかを知ることができないが、この点に関しては今後とも調査を続けたい。

4. フランス語文献における当該記事の位置づけ

次に、この沖縄における洗骨騒動を紹介する記事について、琉球・沖縄に関するフランス側の歴史的文献のなかでこの記事がどのように位置づけられるのか考えてみたい。沖縄本島でコレラが発生したのがちょうど1879年の「琉球処

分」の年であり、記事が書かれた、または翻訳・転載されたその2～3年後の1881年～1882年頃に琉球・沖縄がフランスではどのように認識されていたのかをこの記事を通してうかがい知ることができるかと思う。

フランス人による琉球・沖縄に関する文献は、18世紀の宣教師アントワヌ・ゴビルの文献に始まるが、その後19、20世紀初頭にかけて書かれた文献を概観し分類を試みるなら、大きく4つに分けられるだろう。まず19世紀中頃までの文献で、フランス人が実際には琉球には上陸せず、おもに中国語や英語の記録をもとにフランス語で書いた記録である。次に、1840年代以降に訪れたフランス海軍関係者やパリ外国宣教会の宣教師らによって書かれた文献、そして日本の開国・禁教解除以降、日本の他地域に滞在する者または一時的に来日中の者が琉球・沖縄に立ち寄った時に残した記録、そして最後に沖縄に学術的な調査で訪れた者が残した記録などである。

ここでは、琉球・沖縄関連のフランス語文献の系譜を振り返り、フランス側から向けられた関心がどのように変化していったのかをまとめた後、*Lyon Médical* に掲載された記事について再び考えたい。

(1) フランス人の琉球上陸前の文献

琉球王国に関するフランス語の記録において最も古いものは、北京在住のイエズス会士アントワヌ・ゴビルが著した「シナ人が琉球諸島と呼ぶ諸島についての覚書」がある。これは徐葆光の『中山伝信録』を翻訳した文書で1758年にイエズス会会報に掲載されている。1786年4月にはフランスで当時著名な探検家ラペルーズが与那国島の島民と沿岸上で接触し、その様子が1787年出版の航海記に描かれている（ゴビルの記録・地図を参考に与那国島と判断したとされている）。その後、1824年にドイツ人東洋学者でパリで活躍したユリウス・クラプロートが林子平の『三国通覧図説』等をもとに地図付きの『琉球諸島誌』を出版した。

さらに、1841年には地理学者マルト＝ブランの本 *Précis de Géographie Universelle ou Description de toutes les parties du monde* に約5ページに渡り琉球に関する記述がなされた。マルト＝ブランは当時すでにヨーロッパで出版され

ていた本の情報をもとに琉球について書いている。その情報源となったのは、先のゴービルの報告書のほか、1690年から約2年間出島に滞在したケンペル(ケンプファー)、クラプロート、イギリス海軍士官プロートンやビーチーらの本である。マルト＝ブランはこの中で琉球のことを、東アジアに在外商館を建てるのにふさわしい場所として「十分に栄えている国家であり、我々が興味を示す価値はある」(p.113)と紹介している。

1810年代にバジル・ホール一行を東アジアに派遣し、1か月にわたる琉球滞在中で王府との交易の可能性を探るほか、港の入念な水路測量調査等を行ったイギリスに比べ、フランスは本国での革命の混乱も影響し、東アジアにおける進出は遅れていた。したがって1840年代までは、上述のように実際に琉球に上陸しその様子を記録したフランス人はいなかったのであるが、琉球王国は東アジアのなかで将来の交易に有利な土地の候補としてある程度の認知はされていたということが言える。

(2) 1840年代～1860年代の琉球滞在記

1840年代に入ると、他国に遅ればせながらフランスも東アジア進出に活発になる。1841年、外相だったフランソワ・ギゾーがインドシナ艦隊司令官ジャン＝バティスト・セシーユ提督に東アジア遠征を指示し、セシーユの命を受けて1844年4月にフォルニエ＝デュプラン艦長がアルクメヌス号にて那覇に到着する。この時フランス海軍に同行し、その後那覇で2年間過ごすのがパリ外国宣教会所属のフォルカード神父である。フォルカード神父と入れ替わりで1846年から1848年まではアドネ神父とフューレ神父、しばらく間を置いて1855年から1862年までメルメ＝カションなど5人のフランス人宣教師たちが琉球王国に順次滞在した。これらの宣教師たちは、琉球の人々の暮らしや歴史、政治などについてパリ外国宣教会への報告書や同僚・知人への手紙のなかに詳細な記録を残している。一方で、宣教師たちを運んできた艦船の指揮官やフランス海軍の士官たちも港の様子や地形について、また琉球王府の役人との交渉についてなど様々な場面を記録している。

これらの文献は滞在中に体験したことを描写する見聞録にとどまらず、それ

それのおかれた立場から、宣教師の滞在記には琉球がどのような地で、一般の住民たちはどれほど熱心なキリスト教徒になりうるかということが書かれており、また海軍関係者の滞在記には、琉球が東アジアにおける交易の中継基地として理想的な地かどうか各自の視点が述べられている。したがって、この時期に書かれた記録においては、琉球が前の時代より具体的な布教上・外交上戦略的な地として認識されていると言える。

(3) 日本開国および「琉球処分」前後の見聞録

1850年代に入り日本が開国すると、フランスの目は日本本土へ向けられ、琉球に対する関心は薄らいでいったと言える。この時期には、まだ琉球に滞在していた宣教師たちの記録とは別に、日本に向かう前・後に琉球に寄港する海軍関係者の記録や九州の宣教区から様子を見に来るカトリック教宣教師の記録が残されている。その中でも、例えば王国が琉球藩となっていた1877年5月に寄港したクロシェットリー号に乗船していた海軍中尉ジュール・ルヴェルトガ(Jules Revertegat)³は、未だ荘厳さを保つ首里城をたたえつつ、王国がやがて完全に日本の一地方として吸収され、王が「かつての封建君主たちのように」(p.256)江戸に住まわされるということを見越してその紀行文を閉じている。

その後、奄美大島で宣教活動をしていたオーギュスタン・アルブ(Augustin Halbout)が、カトリック教宣教師不在となった沖縄を1895年に訪れたときの記録には、「琉球処分」後に住民を「日本人化」しようと試みる当局の役人とそれに抵抗する人々の様子などが描写されている⁴。

このように、この時期のフランス語の文献には、琉球王国が琉球藩、沖縄県へと移行する過渡期の様子が記録されており、フランス人旅行者たちが琉球の置かれた政治的な状況や住民の憂慮・懸念、中央政府への反抗心なども少なからず理解していたことが読み取れる。

(4) 学術的文献

日本の開国後、宣教師も外交官も遠のいた琉球・沖縄に目を向けたのは、研究者たちである。例えば、パリの東洋語専門学校の初代教授に就任したレオン・

ド・ロニ (Léon de Rosny) は、1860年代に琉球に滞在した宣教師の一人であるルイ・フューレ (Louis Furet) 神父とも親交があり、1864年以降琉球に関する論文を数本発表している。1903年に沖縄を訪れたモーリス・ド・ペリニー (Maurice de Périgny) は、地理学会に所属し歴史や民俗学にも関心を持っていた人物で、結婚や葬儀の慣習等について記述している。さらに1924年から日仏会館の研究員として日本に8年間滞在したシャルル・アグノエル (Charles Haguenaer) は、1930年に沖縄を訪れ、約1か月半かけて南部・中部・北部を廻り民俗学的な調査を行っている。これらの文献では、琉球・沖縄が日本の他地域とは異なる文化を持つ地として関心・研究の対象となっており、民俗学や地理学、歴史学等の分野での文献が多いことが特徴である。

ここで、*Lyon Médical* の記事に今一度戻ると、医学雑誌の記事であるということも理由であろうが、この中で琉球はフランスにとってもはや布教上・外交上価値のある場所ではなくなっていることが明らかであり、ほんの数年前まで王国だったことに対する言及も見られない。琉球は独特の文化を持った日本の一地方との認識で描写されており、「奇妙で滑稽な」話題を提供する異国趣味を帯びた記事として成り立っていると言える。しかし、その背景を知っている読者が読めば(そのようなフランス人読者がどれだけいたかは想像の域を出ないが)、住民が役人に石を投げるという行為が単に洗骨の儀式を遂行したいがためではなく、そこに込められたより複雑な思いも読み取れたのかもしれない。いずれにせよ、上述した文献の種類に当てはめるなら、(3)の「琉球処分」直後の琉球の様子を伝える記録であると同時に、(4)の日本の一地方としては特殊な文化を持った場所として学術的価値を提示した文書であると言える。

5. おわりに

以上、フランス国立図書館のデータベース Gallica において閲覧できる19世紀の医学雑誌の記事について、全文を翻訳し紹介した。短い内容ながら、琉球諸島の洗骨の儀式を紹介しつつコレラに罹患した死者の洗骨を行う特殊な年のエピソードに言及している一方で、「琉球処分」から2年後という社会的にも特

殊な背景が垣間見える記事である。3章では執筆者不詳で掲載された当該記事の情報源を明らかにするため調査した結果を報告したが、同様な内容を伝える英語の記事も存在することが分かったものの、要となる新聞記事がフランス語でも英語でも手に入らず今後の課題とした。最後に、18世紀から20世紀初頭における琉球・沖縄に関わるフランス語の文献を例を示しながら4つのカテゴリーに分類し、当該記事がその中でどのように位置づけられるか考察した。表面上は日本の一地方の特殊な行事として医学関係者の興味を引き付けるような異国趣味的な内容となっているが、そこに描かれたコレラ罹患者の洗骨をやめさせようとする明治政府と慣習を断行しようとして抵抗する住民との構図は、「琉球処分」を背景とした当時の状況を象徴するものとしても読み取ることができる。

註

- (1) 山城善三・佐久田繁編著『沖縄事始め・世相史事典：明治・大正・昭和：事件と暮らし』p.104参照。
- (2) 深瀬泰旦・真柳誠「明治十二年沖縄県のコレラ流行－土屋寛信の『琉球紀行』から」p.292参照。
- (3) 文献によっては Revertégat との表記もあり、この場合カタカナ表記は「ルヴェルテガ」となる。
- (4) この記録に関しては、拙訳「フォルカード神父の到着から50年後の琉球諸島－アルブ神父の報告書－」参照。

参考文献

志村真幸、「『ノーツ・アンド・クエリーズ』誌のなかの日本－南方熊楠と日本関連論考－」、京都大学・歴史文化社会論講座紀要 No.9、2012、pp.129-146。

深瀬泰旦・真柳誠、「明治十二年沖縄県のコレラ流行－土屋寛信の『琉球紀行』

- から」『日本医史学雑誌』第44巻12号、1998、pp.292-293.
- 山城善三・佐久田繁編著、『沖縄事始め・世相史事典：明治・大正・昭和：事件と暮らし』、沖縄社、1983.
- 琉球政府編『沖縄県史』第22巻(各論編10民族1)、琉球政府、1972年.
- BAUDRIMONT Marielle et POIRIER Jacques « L'iconographie de *la Médecine Populaire*, journal hebdomadaire illustré (1880-1884) », 1990. [https://www.biusante.parisdescartes.fr/sfhm/hsm/HSMx1990x024x003_4/HSMx1990x024x003_4x0213.pdf] (consulté le 1/12/2019)
- EVERARD HOME Coleman, « Curious Custom in Japan » *Notes and Querries*, Vol. 6, Tome 5, p.187.
- HAGUENAUER Charles, *OKINAWA 1930: Notes ethnographiques de Charles Haguenuer*, éditées et commentées par Patrick BEILLEVAIRE, Collège de France Institut des Hautes Etudes Japonaises, 2010.
- HALBOUT Augustin « 50 ans après l'arrivée du P. Forcade aux Ryukyu » Bulletin de la Société des Missions Etrangères de Paris, pp.263-271. (パトリック・ベイヴェール編『西洋の出会った大琉球 第二期：第3巻』Curzon, Edition Synapse, 2000に所収)、[宮里厚子訳「フォルカード神父の到着から50年後の琉球諸島—アルプ神父の報告書—」『国際琉球沖縄論集』第4号、琉球大学国際沖縄研究所、2015、pp.109-116.]
- HOHNSBEIN Axel « Vie et mort d'un hebdomadaire de vulgarisation scientifique: dans les cuisines de *La Science populaire* (1880-1884) », 2019. [https://lasciem.hypotheses.org/189_hal-02143330] (consulté le 5/12/2019)
- MALTE-BRUN Conrad, *Précis de Géographie Universelle ou Description de toutes les parties du monde, sur un plan nouveau*, Tome Cinquième, Furne et Cie, 1841.
- PERIGNY Maurice de « Aux îles Riou-Kiou : un peu d'histoire, Nafa, mariage, funérailles, Shuri, civilisation », Bulletin de la Société franco-japonaise de Paris, 1911, pp.95-99. (パトリック・ベイヴェール編『西洋の出会った大琉球 第二期：第3巻』Curzon, Edition Synapse, 2000に所収)

REVERTEGAT Jules « Une visite aux îles Lou-Tchou, 1877 » in *Le Tour du monde*, 1882, pp.250-256. (パトリック・バイヴェール編『西洋の出会った大琉球 第二期：第3巻』Curzon, Edition Synapse, 2000 に所収)

Lyon Médical : Gazette médicale et Journal de médecine réunis, Tome XLI, le 3/9/1882. [<https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/bpt6k6486610p/f640.image.r=Riukiu%20Lyon%20Médical?rk=21459;2>] (consulté le 5/12/2019)

La Médecine populaire no. 1-37, 1880-1881, Paris, Bibliothèque numérique en histoire des sciences. [<https://iris.univ-lille.fr/handle/1908/2819>] (consulté le 30/11/2019)

« Obituary Notices: Fellows; Coleman, Everard Roberts », *Monthly Notices of the Royal Astronomical Society*, Vol.66, Feb. 1906, pp.163-164. [<http://articles.adsabs.harvard.edu/full/1906MNRAS..66R.163./0000164.000.html>] (consulté le 30/11/2019)

**Le rite du blanchissage des victimes de l'épidémie de choléra de 1879
vu dans un article français**

Atsuko Miyazato

Cet article a pour but de présenter un article paru dans un journal médical français à la fin du 19ème siècle. Il s'agit d'un article qui fait référence au rite du « blanchissage des morts » prariqué aux îles Ryukyu. Mais ce qui est exceptionnel ici, c'est qu'en 1881, les habitants devaient exhumer les victimes de l'épidémie de choléra de 1879. L'article montre ainsi le conflit entre les habitants et le gouvernement de Meiji qui tente de les dissuader.

Après avoir traduit et présenté l'article dans la première partie, nous parlerons ensuite du résultat de notre recherche afin de retrouver la source des informations de cet article anonyme. A la fin, nous essayerons de situer l'article dans la lignée des documents français relatifs aux Ryukyu et à Okinawa pour mieux cerner ce qui est symbolisé dans ce petit épisode à l'époque bouleversant pour Ryukyu/Okinawa.